乳幼児教育相談における保護者支援

～講座・懇談の取り組みを通して～

山中　健二・森　敬子・土手　信・日髙　雄之・鎌田　ルリ子・桑原　美和子

聴覚に障害のある乳幼児は、日々の生活や遊びの中で身近な大人との関わりを通して、心身が健やかに育まれ、聴覚活用や言葉の獲得が促されていく。本校乳幼児教育相談では、保護者が前向きな気持ちをもって子どもを育てていけるように、さまざまな保護者支援に取り組んでいる。その支援の一つとして各種の講座や懇談を行っている。本稿では、今年度計画した講座・懇談の内、これまでに終了したものについて、そのねらいや内容、参加者の様子などをまとめ、保護者支援に取り組んでいく上でどんな視点が重要になるのかを考察した。

キー・ワード：乳幼児教育相談　保護者支援　講座・懇談　親子の関わり

1　はじめに

本校乳幼児教育相談では、聴覚に障害のある乳幼児とその保護者、家族への支援を行っている。

年齢ごとのグループ活動、また個別指導の中で、子どもの育ち、関わり方、音や声を聞かせるときの配慮、言葉のかけ方などについて、保護者が家庭で実践できるよう、その都度具体的に助言を行っている。また、そのときどきの保護者の思いや悩みに耳を傾け、保護者が前向きに子育てに取り組めるよう相談に応じている。このように、それぞれの親子に応じた具体的な支援を日常的に行っていくことを大切にして、保護者支援に取り組んでいる。

そうした日々の取り組みとともに、保護者支援の一環として、年間を通して各種の講座や懇談を行っている。講座では、保護者が見通しをもちながら日々の子育てにあたっていけるよう、聴覚障害についての理解や知識を深める内容を取り上げている。そうした内容に加え、懇談では、参加者同士が交流したり、祖父母などの保護者を取り巻く方々に理解を深めてもらったりすることもねらっている。

本稿では、令和元年度（以下、今年度）に実施した講座や懇談について、そのねらいや内容、参加者の様子などをまとめ、保護者支援に取り組んでいく上でどんな視点が重要になるのかを考察する。

2　年間計画

令和元年度に計画した講座、懇談は、以下の通りである。（Table1）

Table 1　令和元年度　講座・懇談年間計画

5月	ミニ講座（2歳児）
	ミニ講座（1歳児）
	ミニ講座（0歳児）
6月	母親講座「きこえ」
	父親保育・懇談（2歳児）
7月	母親講座「ことば」
	幼稚部参観・懇談
9月	祖父母懇談
10月	母親講座「母親体験談」
11月	母親講座「生活習慣・しつけ」
12月	幼稚部参観・懇談
1月	両親講座「幼稚部の教育」
3月	幼稚部参観・懇談

3　各講座・懇談について

(1)　ミニ講座

ミニ講座は、年度初めの新しい年齢でのグループ活動に慣れてきた時期に、年齢ごとに行っている講座である。各年齢での１年間の子どもの育ちや年齢や発達に応じた関わり方などについて話をしている。

今年度行った講座の内容は、以下の通りである。

①　2歳児（５月16日）

・子どもの気持ちを汲み取って関わる。

子どもの動きや表情などを逃さずよく見る。先回りをせずに見守ったり、子どもの行くところにすぐについて行って関わったりすることが大事である。

・子どもがわかるように伝える。

十分に聞こえる声､受け取りやすい速さで話し、身振りや表情、動きなどを工夫して伝える。実際にやったり、絵や写真を使ったりすることも有効である。

・身の回りのことを自分でするよう促す。

励ましたりほめたりしながら身のまわりのことをさせる。難しいことは手伝いながら、最後は自分の手でやり遂げるようにする。子どもが達成感を感じたり、親子の関係が深まったりすることにつながる。

②　1歳児（５月17日）

・親子で楽しく遊ぶ。

とにかく親子でたくさん楽しく遊ぶ。どんなふうにしたら子どもが喜んで何回もやりたくなるのか、大人が実際に動いてやってみることが大切である。動きや表情を豊かにして関わると、気持ちも子どもにわかりやすく伝わる。一緒に遊んで楽しいと思うことが、人との関わりにつながりコミュニケーションや言葉へと結びついていく。

・やり方をよく見せてあげる。

子どもは大人の動きをとてもよく見ていて、その中でいろいろなことを掴み取っていく。生活全般でやり方をよく見せてあげると、できることやわかることが増えていく。

③　0歳児（５月21日）

・子どものすることを真似する。
・子どもが喜ぶことを繰り返す。
・目と目を合わせて話しかける。
・子どもに近寄って話しかける。
・お母さんの姿勢を低くする。

いろいろな世話をしたりあやしたりしながら、親子で楽しく過ごす。子どもの動きに合わせて同じ動きをしてあげると、とても喜ぶ。喜ぶことを何回も繰り返すことで、関わるのが楽しいという気持ちが育つ。楽しいときは声もたくさん出てくる。子どもの気持ちや動きに合わせて、擬態語を使いながら声や言葉を聞かせる。また､向き合って表情を見せる、近くで話しかける、目線の高さに合わせるといったことも気をつけていく。

(2)　母親講座

母親講座は、各回のテーマを設け、全員の保護者を対象に行っている講座である。

今年度は、「きこえ」「ことば」「母親体験談」「生活習慣・しつけ」のテーマで講座を行った。内容や話題となったこと、参加者の様子については、以下の通りである。

①　きこえ（６月19日）

今年度は､「耳のしくみ」「オージオグラムの見方」「音の大きさと高さ」「補聴機器の特徴と管理」などの聴覚障害や補聴機器に関する基本的な話とともに、「きこえの体験」「聴覚活用を促すかかわり」などを取り上げて講座を行った。

音や声がどう伝わって聞こえるのか、それぞれの子どもの聴力ではどのくらいの大きさや高さで音や声が聞こえているのか、補聴器や人工内耳などの補聴機器（以下、補聴機器）をつけるとどのくらい聞こえるようになるのかなど、保護者が子どもの聞こえ方をよく知っておくことは大事なことである。また、補聴機器の特徴をよく理解したり、補聴機器がきちんと作動するように日々確認や管理をしたりすることも、聴覚を最大限に活用していく上で必要となることである。

「きこえの体験」では、参加者が二人一組になり、一人が耳をふさいで相手が文章を読むのを聞くという方法で難聴の疑似体験を行った。文章は、よく知られている動物や飲み物などについてその特徴や効果などを説明した文で、ところどころ日常生活ではあまり使われることのない言葉や言い回しが含まれているものである。読み方としては、１回目は早口で、２回目は相手に伝わるよう工夫して読むようにした。早口ではほとんどわからなかったものが、ゆっくりはっきり話したり身振りを使ったりして伝え方を工夫したことで、参加者はお互いに「わかった」「伝わった」という実感がもてたようである。簡単な疑似体験ではあったが、参加者からは、「子どもに話すときにもっと気をつけていかなければならないと思った。」といった声もあり、聞かせ方や伝え方をさらに気をつけていこうと意識するきっかけとなったようである。

子どもの聴覚活用が促されていくには、身近な人との関わりが必要となる。まず親子でたくさん楽しんで遊ぶことが大切で、その中で子どもが音や声を楽しんで聞きその意味に気づいていくようになる。また、大人がいろいろな音に敏感になって子どもに気づかせていったり、子どもの様子をよく見て子どもが気づいた音を聞き逃さず親子で一緒に聞いたりすることで、さらに子どもの聴覚活用が促されていくと考える。

②　ことば（７月３日）

言葉の育ちは、身体、情緒、認知などの全体の発達と切り離せないものである。言葉は、実際の生活や遊びを通して身につけていくもので、人との関わりの中で育つ。そうした点で、言葉は子どもの生活そのものであると言える。

言葉の育ちに関して、保護者は「なかなか声が出てこない。」「自分から伝えてこない。」「状況でわかっているのか言葉でわかっているのかわからない。」「言葉だけでわかるようにはなったが、なかなか自分では言わない。」「興味があることは覚えるのに、興味がないことはなかなか覚えない。」「発音がうまくできない。」など、年齢や発達に応じた悩みをもっている。そこで、生活や遊びの中で、どんなふうに言葉が育っていくのか、どんなことに気をつけて関わっていけばよいのかということを中心に講座を行った。

まず、言葉がわかり自分で言うようになるまでの過程や、言葉をかけるときに気をつけることなどの基本的な話を取り上げた。十分に聞こえる大きさの声でゆっくりはっきり話すこと、子どもの目の高さで正面から話しかけること、身振りや擬態語などを使ってわかるように話すこと、繰り返し言葉を聞かせること、毎日同じ場面で同じ言葉をかけていくことなどが、言葉をきちんと受け取り理解するようになるのに必要となる。

遊びの中での言葉かけについて、親子で玉を箱に投げ入れて遊ぶ場面を想定して、参加者で意見を出し合った。具体的にどんな言葉をかけていったらよいか、実際に遊びでのやりとりを進めながらその都度考えていった。参加者からは、「どれであそぼうか。」「ぽーんってあそぼう。」「よいしょ、よいしょ、もっていくよ。」「ばらばらー、たまいっぱーい。」「いれるよ、ぽーん。」「まっててね。」「いいよ。」「あら、もうなーいね。」「ぜんぶ、はいったよ。」など、子どもの動きや状況に合わせた言葉が出された。また、「これがいいな。」「あそびたい。」「これであそぼう。」「おもーい。」「やって。」「てつだって。」「わあ、いっぱーい。」「いくよー。」「やったー。はいったー。」「あーあ、ざーんねん。」「おしい。もうすこし。」「もういっかい、やろう。」など、子どもの気持ちに合わせた言葉も出てきた。親子で楽しみながら遊ぶ中で、もっと声をかけながら言葉を聞かせていこうと、あらためて意識をもつことにつながったようである。

乳幼児期は、まだまだ自分から伝えてくることが少ないので、大人が子どもの気持ちを汲んで言葉をかけていくことが必要となる。そこでは、子どもが見ていることや指をさしていることについて話してあげること、子どもがしてほしいことやしたいことを言葉にすること、子どもの表情や動きをよく見て思っていることや言いたいことを汲み取り言葉にすることなど、丁寧に関わっていくことが言葉の育ちへとつながっていく。

③　母親体験談（10 月 7 日）

本校幼稚部を修了し、小学部を経て現在中学部１年生となった生徒の母親２名を迎え、「母親体験談」として講座を行った。講座の中では、具体的に子どもの姿や成長がわかるように、幼稚部のときの様子や事前に撮っておいた自己紹介をビデオで見てもらった。

講師の母親からは、聴覚に障害があることがわかったときの気持ち、なんとか育つようにと日々子どもに向き合ってきた思い、具体的な関わり方や取り組み、子どもが成長してきた様子などを中心に、乳幼児期から現在にかけて経験してきたことやそのときどきに思ったことについて話をしていただいた。

その中で、家族にも協力してもらいながらできる限りのことを注いで子どもを育ててきたこと、何度も何度も繰り返し根気強く言葉を育ててきたことなど、親としての意気込みや努力を重ねた思いが伝わってくる話を聞くことができ、とても印象深い講座となった。

参加者からは、「母親以外の人とのやりとり」「習い事での配慮」「家の環境で気をつけたこと」「絵カードや写真の使い方や時期」「補聴器をつけ始めた頃の関わり」「言葉が出始めた時期に気をつけたこと」「子どもが話すようになるために家庭でできること」「話し方をきちんと身につけていくために意識したこと」「子ども自身の難聴への気づきや受け止め」「母親のライフスタイルの変化」などについての質問があった。また、「子どもが成長する様子を見て希望がもてた。」「今できることをコツコツとやっていこうと思った。」などの感想も聞かれた。

同じ障害のある子どもを育ててきた先輩の母親の話ということで、共感するところや参考になるところが多くあり、今後の子育てへの大きな励みになったようである。

④　生活習慣・しつけ（11 月 27 日）

「子どもの成長に合わせた関わり、自立にむけて」というテーマで講座を行った。

子どもが、ものごとを理解したり言葉を覚えたりするには、脳全体がスムーズに働かなければならない。そのためには、体調を整え気持ちがよい状態であることが必要となる。そこで、食べること、身体を動かすこと、生活リズムを整えることなど、基本的生活習慣がとても大事になる。

以上のような観点を踏まえ、食事、睡眠、排泄、衣類の着脱、清潔など、子どもの成長に合わせた具体的な取り組みについての話を取り上げた。

しつけの面では、講座の中で「今朝出かけるまでに大変だったこと」といった話をきっかけに、参加者からも日々悩んでいることや子どもの様子、家で取り組んでいることなどについての話題が出され、参加者同士でお互いの子どもの様子を話し合ったり、家庭で取り組んでいることの情報交換をしたりすることができた。

子どもの成長に伴い、その一方で新たな大変さが出てくるようである。子どもの自分でやりたいと思う気持ちを認め大切にしながら、見守ったり教えたりしていくことが大事である。また、ほめたり励ましたりしながら取り組んでいくことで、親子の関係も深まってくると考える。

(3)　父親保育・懇談（６月 22 日）

２歳児グループの父親を対象に、例年６月に父親保育・懇談を設けている。父親と子どもの二人で登校し、グループ活動をしたあと懇談を行っている。

子どもたちは、父親がたくさんいる様子にいつもとは違う雰囲気を感じ、登校直後はじっと様子を見ている子どもも多かった。通常は３グループに分かれてそれぞれのプレイルームで活動を行っているが、この日は幼稚部棟のホールで３グループ合同で活動を行った。親子で自由遊びをしたあと、全員でリズム遊びや触れ合い遊び、「むっくりくまさん」のゲームなどをして遊んだ。特にブランコやロケットの触れ合い遊びでは、父親が子どもを抱っこして揺らしたり高く抱き上げたりするときの動きがダイナミックで、子どもたちがとても喜んでいた。

懇談では、「家とは違う子どもの姿が見られた。」「普段のグループ活動の様子が見られてよかった。」「子どもと二人で来てみて、母親の大変さがわかった。」「母親に感謝している。」などの話があった。

(4)　祖父母懇談（９月 11 日）

祖父母を対象に、聴覚障害のある子どもたちの育ちや教育、保護者の思いなどについて理解を深めてもらうことを目的として、例年９月に祖父母懇談を設けている。今年度も、幼稚部参観をしたあと、懇談を行った。

懇談では、孫と楽しく遊ぶ嬉しさ、関わる上での難しさ、保護者として頑張っている我が子への思いなど、それぞれの参加者から話があった。こちらからは、それぞれの子どもの最近の様子、保護者の思いや努力して取り組んでいること、子どもとの関わり方などについて伝えた。

障害のある子どもを育てる保護者にとって、祖父母の理解や協力は大きな支えとなるものである。この祖父母懇談がきっかけとなり、保護者へのより大きな力へとつながればと考えている。

(5)　幼稚部参観・懇談（各学期末）

幼稚部参観・懇談は、全員の保護者を対象に各学期末に行っている。

幼稚部参観では、実際の幼稚部の活動の参観を通して、本校幼稚部の教育や聴覚障害のある子どもたちの育ちを知ってもらう機会となっている。それぞれの保護者によって参観する観点は異なるが、年齢ごとの子どもたちの成長、子ども同士のやりとりの様子、理解や言葉に関する配慮や手立てなどが主な参観のポイントとなる。

また、年齢によっても保護者の視点は異なり、次のような声も聞こえた。教育相談を受け始めまだ間もない 0 歳児の保護者は、「まだまだ赤ちゃんで見通しがもてないが、幼稚部の子どもたちみたいに育っていってくれたらと思う。」、3 歳児以降の進路を考え始める時期の 1 歳児の保護者は、「言葉を身につけるためには丁寧に関わっていかなければと思った。とても時間がかかるものなのだと感じた。」、幼稚部入学を控えている 2 歳児の保護者は、「来年の 4 月からは自分がこの場にいるのだなという目でみることができた。これから頑張らないといけないと思った。」などと、それぞれの年齢に応じた感想をもったようであった。

幼稚部参観をしたあとには、参加者全員で懇談を行っている。各回の懇談では、幼稚部参観の感想、幼稚部の教育に関する質問、現在の思い等が話題の中心となった。「自分にはない視点での感想や質問が聞けてよかった。」「下の年齢のお母さんの話を聞いて、そのときは大変だったが、今思うとなんとか育ってきたのかなと感じる。」など、異年齢の保護者同士の交流の場にもなっている。

(6)　両親講座（１月 18 日）

今年度は、「幼稚部の教育」をテーマとして両親講座を行う予定である。

4　まとめと今後の課題

保護者支援の一環として、講座や懇談に取り組んできた。今年度の講座や懇談を振り返ると、必ず話題となったのは親子での関わりであった。このことは、体や心が発達する、ものごとを理解する、聴覚を活用する、言葉を身につけるなど、子どもの育ちに関するどの面でも、保護者がどう子どもと関わっていくかということが大事なことであると、あらためて示したものとなった。

今後も、親子の関わりがより深まり、その関わりの中で子どもが育っていくという視点で講座や懇談を計画し行っていきたいと考えている。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。